

LD 等通級指導教室の『運営』 & 『活用』 ガイドの構築（2 年次）

－ 担当者による通級エリア校における効率的な連携の在り方－

景山 功一（京都市総合教育センター研究課 研究員）

本研究は、「LD 等通級指導教室の『運営』 & 『活用』 ガイド」の作成を目指し、専門性を担保した LD 等通級指導教室の運営に関する研究である。昨年度は、筆者が作成した年間運営計画及び通級による指導への道筋の試案に基づき、担当者による読字・書字のつまずき把握と指導・評価の実践を行った。その結果、児童の読字・書字のつまずきの早期発見・早期支援に加え、児童の実態把握や指導・支援の検討といった校内支援の中心的な存在として、担当者が機能的な役割を果たしていたことが認められた。今年度は、担当者と設置校及び巡回校を含む学校群（以下、「通級エリア校」という）との連携に着目した研究を進め、通級エリア校における効率的な連携の在り方と、その具体的な方策について考察した。

第 1 章 LD 等通級指導教室における連携

第 1 節 LD 等通級指導教室における連携とは

小学校学習指導要領には、通級による指導に関して「教師間の連携に努め、効果的な指導を行うこと」とあり、LD 等通級指導教室における連携は、欠かすことのできない教育的な営みであるといえる。以下の枠内は、LD 等通級指導教室における連携について筆者がまとめたものである。

【連携の目的（何のために）】

連携は、通級による指導の効果を高めるために行う。そして、普通学級での指導・支援の充実を図り、通級による指導終了後においても指導・支援を継続するために行う。

【連携の該当者（誰が）】

連携は、同じ目的をもつ、担当者や学校の教職員、保護者、そして、関係諸機関の関係者が行う。

【連携の方法（何を、どのように）】

連携は、各者の役割分担の下で連絡をとり合い、情報交換をする。そして、協働的に子どもの指導・支援や養育、療育・相談をしたり、その点検や評価をしたりする。

第 2 節 LD 等通級指導教室における連携の現状

平成 27 年 5 月、本市の LD 等通級指導教室を対象に実施した本市実態調査から、担当者は通級エリア校との連携を重要であるにとらえている。しかし、設置校での連携に比べ巡回校との連携の方が、効率的に進めにくく、連携方法についても明確になっていない現状があることがわかった。

担当者と巡回校との連携については、物理的な環境や勤務形態といった要因が影響し、効率的な連携が進めにくい現状がある。そこで、連携の目的を達成できるよう、連携内容や役割分担を明確にした上で、計画性のある組織的な連携を進めることが、担当者には求められている。

第 2 章 担当者による通級エリア校における効率的な連携

第 1 節 本研究について

通級による指導の目的を達成するための、通級エリア校における効率的な連携の在り方について、以下に示す教育実践を通して研究を行う。

① 連携計画の策定による連携方法の明確化

担当者と通級エリア校が、連携に関する協議を行い、各校の実態に応じた連携方法の明確化を図り、連携計画を策定する。

② 連携計画に沿った教育実践の推進

連携計画に沿って、日常的な連携と定期的な連携を進める。

第 2 節 効率的な連携を図るための具体

筆者は、担当者と通級エリア校との連携を整理し、具体的な内容として、表 1 にまとめた。

表 1 連携の具体的な内容

	直接的な連携	間接的な連携
定期的な連携	<ul style="list-style-type: none"> ・ 校内委員会 ・ 個別ケース会 ・ 保護者面談 ・ 関係諸機関とのケース会 ・ 学級訪問 ・ 授業公開 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 通級だより ・ 通知票、評価シート ・ 指導の記録
日常的な連携	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学級担任との情報交換 ・ 保護者との情報交換 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 連絡ノート ・ 窓口役との情報交換や日程調整

第 3 節 連携の進め方

担当者は、通級エリア校と連携会議を開催し、年間の連携計画を策定する。そして、策定した連携計画に沿って、日常的、定期的に連携を進める。

第3章 担当者による通級エリア校との連携の実際

第1節 指導中における連携

◆連携会議

連携会議では、連携の目的を確認した後、定期的な連携と日常的な連携の具体とその方法、日程について協議し、年間の連携計画を策定した。

◆定期的な連携

定期的な連携は、学級訪問、個別ケース会、保護者面談といった一連の流れのある連携と、研究協力校にある既存の組織を活用した校内研修会及び総合育成支援教育部会への参加を行った。

個別ケース会では、多面的に対象児の情報や意見を共有するため、進行役の割り当てと進行表の作成、そして個別の指導計画の資料提示の工夫を行った。その結果、PDCA サイクルに基づく指導・支援の検討や学級担任と担当者との相互理解につながる協議ができた。

校内研修会や総合育成支援教育部会への参加は、LD 等通級指導教室の啓発と困りを感じている子どもの実態把握や指導・支援の検討といった校内全体での教育の推進などにつながる効果があった。

◆日常的な連携

日常的な連携は、直接的な連携「学級担任との情報交換」、間接的な連携①「連絡ノート」、そして間接的な連携②「窓口連携」を行った。

直接的な連携では、双方向のやり取りができ、タイミングのいい情報共有ができた。そして、間接的な連携①「連絡ノート」では、直接的な連携を補う相互の学びの場での対象児の把握ができ、指導・支援に反映する連携であることがわかった。また、間接的な連携②「窓口連携」は、直接的な連携を補う情報共有とその後の指導・支援の検討につながる可能性が確認できた。

第2節 指導開始の過程における連携

担当者による授業観察と個別ケース会Ⅰ、保護者面談、連携会議（個別ケース会Ⅱ）を通じて、相互の役割分担や連携の仕方を確認することが、円滑な指導開始への道筋となることがわかった。

第3節 指導終了の過程における連携

指導中における個別ケース会を通じて、通級による指導の必要性やその役割、指導・支援の検討について繰り返し協議することが、指導終了への道筋に向かうことがわかった。

第4章 これからのLD等通級指導教室

第1節 研究の成果と課題

研究協力校での実践を通して、実践前後の連携に関する調査から、一定の連携時間の確保と「手立て」「成果」の共有といった連携内容に変容がみられた。また、聞き取り調査において、連携意識の強化や実感を伴った成果の共有が図られていた。

よって、担当者を含めた通級エリア校の教員がLD等通級指導教室の『運営』と『活用』に参画し、計画性と柔軟性のある定期的な連携を進め、相互理解の深化を図る。そして、継続性のある日常的な連携を意識的かつ組織的に進め、相互の学びの場における連続性のある指導・支援を行う。以上のことが、連携を進める上で重要であると考えられる。また、本研究を通して、相互推進型の協働的な連携が、通級エリア校における効率的な連携の在り方であることがみえてきた。

第2節 「読字・書字」のつまずき把握と指導・評価の実践の拡がり

昨年度の研究において、筆者は読字・書字のつまずき把握と指導・評価のプログラムを考案した。年間運営計画に位置付け、通級による指導の必要性の早期把握となる判断と指導・支援を行う仕組みである。今年度も特殊音節の理解と書字力の向上に効果があることが示された。読み書き困難のある児童への指導・支援の一環として、本プログラムが実践されることを期待する。

第3節 持続可能なLD等通級指導教室の『運営』&『活用』を目指して

この2年間の研究を通じて筆者が感じた、持続可能なLD等通級指導教室の『運営』と『活用』を促進していくためのポイント五つを以下に示す。

- ①拠点校方式によるLD等通級指導教室の運営
- ②縦と横を意識した連携の充実
- ③資質向上を目指したブロック連絡会の運営
- ④LD等通級指導教室の教育研究団体の設立
- ⑤担当者としての指導力
 - *特別支援教育に関する知識やスキル
 - *普通学級における学級経営及び教科指導のスキル
 - *順応性のある人間関係の形成力とネットワークの広さ
 - *柔軟な対応力とフットワークの軽快さ
 - *子ども、保護者、教職員に徹底的に寄り添う意識
 - *担当者としての“やりがい”

通級による指導の目的の達成、言いかえると、担当者としての“やりがい”である「子どもが変わる」ことにつながるLD等通級指導教室の『運営』と『活用』が、本市の学校に拡がることを願う。